支那の北族諸朝と漢文明

一

こゝに北族と申します名稱に就ては一寸お斷り申して置かなければならぬ、適當な名前がありませぬので、ぼんやり北族と云ふ名前を用ゐたのでありますが、要するに支那の北の方、或はもつと細かく申しますれば東の方をも含む譯で、その地方に據つて居つた民族の中、支那に出て朝廷を立てた民族が、支那の文明卽ち漢文明に對してどう云ふ態度をとつたものであるかと云ふことについて少しく管見を申上げて見たいと思ふのであります。尤も斯う云ふ話は決して新しい話ではなく、從來から度々論ぜられた問題でありますので珍らしくない、それではそれに就いて何か新しい見解でもあるかと申しますと、別にさう云ふのでもない、たゞ責め塞ぎに過ぎないのであります。

それで申上げるまでもなく、支那の北の方の民族若くは東の方に寄つた民族で支那に這入り込んで朝廷を建てたものは決して少なくはありませぬ、歷史の上に所謂五胡十六國と云ふやうな時代のことは暫く省略すると致しましてもやゝ大きい勢力を占めて支那の北の半分を領したとか、若くはその一部分を領したとか、或はまた支那全體を支配したと云ふ朝廷は少くないのである、例へば五胡十六國の後始末をつけた魏の朝廷、續きまして遼河の上流から起つた契丹卽ち遼であるとか、或は黑龍江の邊から起つて來ました金であるとか、或はまた外蒙古から出て來て